

幸せの家―サンプル―

しとしとと、雨の音が聞こえる。今年は空梅雨だと聞いていたのに、なぜか夜になると降る、という不思議な現象が続いていた。

(降ってきたのか……)

でもどうして目が覚めたのだろう。とても眠りを妨げるような音ではないのに――不思議に思ったところで気が付いた。

身体が揺れている。胸の辺りが濡れている――。

爽はハツとして、急いで臉を上げた。

「……たっちゃん」

「っ……」

やはりそうだった。腕の中で、たっちゃんが泣いている。

「たっちゃん、ごめんね、一人で泣かせちゃったね」

怖い夢を見たら起こしていいんだよ、と言ってあったけれど――いや、そういう言い方をしてしまったせいで起こせなかったのだろう。たっちゃんは怖い夢を見たのではなく、先の不安で泣いていたのだ。

小さく震え、声もなく涙を零す身体を抱きしめる。

「たっちゃん……」

たっちゃんがこの施設に来たのはちょうど二年前のことだ。恋人に捨てられて、心が壊れてしまつてやつてきた。

ここに来たときのたっちゃんは感情を失い、自分で食事もとれないくらいに憔悴していて。病院に入院させた方がいいのでは、という話し合いも持たれたのだけれど、どうにか自分に任せてほしいと園長に直談判して無理矢理担当にもらったのだ。

「たっちゃん、新しいおうちに行くの、また今度にしようか」

腕の中の身体がびくりと揺れた。そして、止まる。

「いいんだよ、たっちゃん。一番大事なのはたっちゃんが安心して過ごせることだからね」
たっちゃんは明日、新しい家の子になる予定だった。新しい家の子、と言っても相手は男性の一人暮らし。それに子供してもらわれていくのではなく、恋人として行く。

しかし、恋人に捨てられたことでここに来た子たちはみんな、捨てられる恐怖によって次の恋に進めなくなつてしまっている。でもいつまでもここにすることはできないし、可愛い子たちを愛でたいという男性はひっきりなしにここに好みの子を探しにやつてくる。

だから、爽は何度も面談を重ね、相性の良さそうな二人をマッチングして仲を取り持ち、二人が幸せになれるようにする手伝いをしているのだ。

「たっちゃん、大丈夫、怖くないよ。島原さんは怒ったりしないからね」

たっちゃんは、すでに一年もの時間を掛けて新しい恋人である島原との面談を続けていた。それでもまだ、恐怖心は消えない。

普段はみんな個室で一人で眠っている。来たばかりで不安定な子は一緒に寝たりもするけれど、長くここにいたたっちゃんとうとうして一緒に寝ていた理由はまさにそこ。もらわれていく前夜は、どうしても不安になってしまいうから。

「電話してみるね。大丈夫だからね」

たっちゃんはまだ、言葉を発することができない。恋人に振られたショックで声を失ったままなのだ。

ベッドから腕を伸ばして携帯を取る。登録された島原の短縮を押し、スピーカーにして枕元に置いた。時刻は深夜二時。でも大事なのはたっちゃんの精神の安定だった。

「大丈夫だよ——」

たっちゃんを抱きしめ頭を撫でていると、島原は2コールで応答した。さすがに早い。きつと、電話が来るかもしれないとドキドキしていたのだろう。

『もしもしっ』

「夜分にすみません」

『いえ……』

きつと、これが明日の引き取りの断りだということに気付いたのだろう。声のトーンは低いが、それを出さないようにしているのがよく分かった。

「……申し訳ないのですが、明日は——」

『分かりました』

最後まで言わずとも、島原はやはり分かっていた。

『あの、たつくんは体調を崩したりはしていませんか』

「え？」

『明日のこと、ストレスになってお腹を壊したりとか』

島原は本当に優しい人だ。何よりたっちゃんのことを一番に考え、自分よりも仕事よりもたっちゃんを優先してくれる人。だから本当は、たっちゃんにも「大丈夫だから行っておいで」と言っただけ。でもそれは決してはいけないことだから。

「少々お待ちください」

怯えた目をするたっちゃんの頭をもう一度撫で、身体を起こす。それからたっちゃんの腰に顔を近付けて、臭いを嗅ぐ。

「もしもし。お腹は壊していないようですよ」

たっちゃんは、肛門括約筋の損傷手術を受けていた。だから便は、そのままオムツに排泄されている。

『よかった……。たつくんに、明日のことは気にしないようにと伝えていただけですか』

「島原さん……」

本当は相当ショックを受けているはずだ。島原はたっちゃんと出会ってからの一年、週に

何日もこの施設に通い続けた。毎回お土産を買い、それでもたっちゃんの調子次第では会うことも叶わないなんて日もたくさんあった。それでもいいのだ、と島原はいつも言っていた。断れるようになってくれて嬉しいと言うことさえあった。そうしてお土産をおいて、また数日後にやってきて。決して無理強いはせず、会えたときは手を握るだけでただ静かにたった数十分過ぎただけで仕事に戻っていったりもして。

『私はこれから、死ぬまでずっとたつくと一緒にいるつもりです。だからあと一年や二年待つくらいなんともないですよ』

島原は、爽から見ても本当にたっちゃんのことを溺愛していた。

普通、声が出ない、排泄も自分でできないとなると貰い手はぐっと少なくなる。でも島原はたっちゃんがいいと一目見た瞬間に決めた。最初こそ一目惚れだったのかもしれないけれど、それから一度だつて他に目を向けることなく、ただたっちゃんだけを見つめ続けていた。

『また明後日、会いに行くからと伝えてください』

「分かりまし——」

そのとき、腕の中のたっちゃんが動いた。

「——すみません、少々お待ちください」

どうしたのだろう。身体を少しだけ離して顔を覗き見ると、たっちゃんはまた身体を震わせ泣いていた。

「たっちゃん、どうしたの？ ……会いたい？」

さつきも泣いていたけれど、断つて安堵したはずなのにまた泣き出すなんておかしい。そう思うと、会いたいのかも、と思ったのだ。そしてやはりその考えは正しかった。たっちゃんは泣きながら頷いた。

「今から会いに来てもらう？ でもお迎えは明日じゃなくてもいいんだよ。たっちゃんが行きたいって思う日で」

たっちゃんはまた顎を引いた。きつと、島原が明日のキャンセルを責めるどころか身体を心配してくれたのが嬉しかったのだろう。

「……じゃあ、今から会いに来てもらう？ ギゅってしてもらうだけで、帰ってもらってもいいんだよ」

電話は静かだった。きつと今頃、島原は耳を澄ませているに違いない。たっちゃんの頷く音、首を振る音……そんな些細な衣擦れの音さえも聞き漏らすまいと、必死になっているはずだ。

「……たっちゃん？」

反応がぱたりとなくなってしまった。どうしたのだろう、と思っていると、たっちゃんが一所懸命口を動かし始めた。話そうとしている。それすら、この二年で初めてのこと。

「たっちゃん？」

「……い、く……」

「っ！」

声が、出た。泣いても、驚いても一度も出なかった声が。

「たっちゃん！」

「い、く……」

「……行くの？ 島原さんのところ」

「い、く」

今度の声は、きつと島原にも聞こえたことだろう。

「島原さん！」

『聞こえました！ たつくん、そこにいるんだね？ 今から行くから！』

受話口からがたがたという音が聞こえた。恐らく大急ぎで家を出ようとしているのだろう。でも電話が切られることはない。まだ何か言うかもしれないと思うと切れることもできずそのままにしていると、やはり島原の声が聞こえた。

「今から行きます。でも、気が変わったらそれでかまわないと伝えてください」

言い切ると、耳にあてていたら痛んだだろうな、と思う程のガチャ切り。普段ならこちらが切るまで決して受話器を置かない丁寧な人。でも、そんな風に焦っているところさえも微笑ましい。

「たっちゃん、よかったね。島原さん会いに来てくれるって」

もしかしたら、たっちゃんの胸はすでに不安に支配されてしまっているかもしれない。それなら、申し訳ないけれど来てもらっても島原にはそのまま帰ってもらおうしかない。

でもそれは仕方がないので。ここにいる子の精神はみんな普通ではない状態になってしまっているのだから。

ここに来るのはただ失恋で傷付いたというだけの子ではない。恋人のために身体を弄り、普通ではない身体になるほど好きだった相手に捨てられた子だけがここに集められている。

例えばたっちゃんなら肛門括約筋の損傷手術。セックスの際、アナルを慣らす手間がないように、という理由だったと推測できる。中には排泄物の処理がしたいからとその手術を求める人もいるけれど。

(そんなこと、言い方次第でどうとも言える……)

そういう勝手な元恋人たちのことを考えると吐き気がする。身体まで変えさせているのだから本来もつと大事にしなければならぬのに、簡単に捨てて。中には別れを告げることもなく、突然帰って来なくなってしまう人も——。

「……たっちゃん、もうすぐ着くよ」

そろそろ電話を切って十分が経つ。最初こそ遠くに住んでいたのだけれど、島原はたっちゃんのために近所に引っ越しまでしてきていたのだ。それくらい、心からたっちゃんを愛している。

「せん、せ」

「たっちゃん……!!」

先生、と呼んだ。呼んでくれた。なんだかもう、泣きそうだった。

「うん、たっちゃん。先生いるよ。いるからね」

ぎゅっと抱きしめると、たっちゃんも背中に腕を回してくれた。可愛いたっちゃん。心の

傷はまだ完全に癒えたわけではないけれど、こうして抱きしめてくれるようになったのだから回復の一つだった。

しばらくそうして幸せを噛みしめていると携帯が鳴った。相手は島原で、施設に着いたと言う。

「たつちゃん、島原さん着いたって」

もう一度声を出せるかもしれない。島原にも聞かせてやりたくて、スピーカーにしてたつちゃんの前に置く。

「おう、ち。いく……」

『たつくん！ すぐ行きます！』

パタパタと小走りする音。夜中なのだけれど、個室は全て防音になっているので他の子が起きてしまうということはないだろう。それから受付で手続きをする音が聞こえて、部屋のチャイムが鳴る。

「たつちゃん、どうする？」

「あう」

会う——その言葉がすごく嬉しかった。もう一度抱きしめる腕に力を入れてから、たつちゃんを残してベッドを降りる。

ドアを開けると、そこには息を切らした島原がいた。シャツのボタンが一つずれてしまっているのはそれだけ急いで来たという証だ。たつちゃんを愛しているという証。

「こつ、こんばんはっ！」

「すみません、夜中に」

「いえ、たつくんは、」

「少しお待ちください」

ベッドを振り向くと、寝転んでいたたつちゃんは上体を起こしていた。それからゆつくりとベッドを降り、こちらに歩いてくる。

「たつくん……」

「……すき」

「——！」

眩暈がした。爽でさえ眩暈がしたのだから、きっと島原は頭が真っ白になったことだろう。

「たつくん……！」

ゆつくりと伸ばされた腕の中に、たつちゃんが自ら入っていく。

「ああ……たつくん……愛してる……」

これでもう、爽の役目は終わりだった。たつくんはこのまま島原と施設を出て行くことになる。

「……たつちゃん、おめでとう」

「せん、」

「——うん。先生はずっとたつちゃんの先生だよ。だからね、いつでも遊びに来ていいんだよ。ここはたつちゃんのもう一つのおうちだから」

いかにもこれでさようなら、という台詞だけれど、実際にはここを出る子とそのパートナーには翌日にここに来てもらうことになっている。

こうして引き渡しを迎える前に何度か外出、外泊は経験させているものの、いざ引き渡しとなるとストレスになってしまう子がいるからだ。だから引き渡しの翌日とその二日後、それから一週間後、二週間後、一か月後、三か月後……と少しずつ時間を空けながらここに来てもらう。そうして様子を見て、時に励ましたり、慰めたり、もう一度ここに戻らせたりと、とにかく心が一番安定できるようにしながら少しずつ完全卒園に向かわせるのだ。

~~~~~

「やば」

時計を見ると約束の時間まであと十分しかなかった。島原とたつちゃんが飲んだお茶とジュースのコップを片付け、足早に応接室に向かう。

（今日の方の名前は確か……）

ファイリングしておいた書類を見ながら廊下を進む。そうだ、名前は牧原だ。牧原博信、三十八歳。証券会社を退職後、株取引で生計を立てている——なら、ずっと家にいられるのだろう。そういう人でないと、この子を引き取るというのはなかなか難しい。日中仕事に出掛けると、帰ってこないかもしれないと不安になってしまう子が多いのだ。

ノックをして応接室に入る。すでに牧原は椅子に座っていた。

「すみません、遅くなりまして」

「とんでもないです。お忙しいところすみません」

腰を上げた牧原から名刺をもらう。こちらの名刺はないので、名乗るだけにして頭を下げる。

「お座りください」

牧原は「失礼します」と一礼してから席に着いた。預かっている履歴書の文字からしても、どうやら律儀で丁寧なタイプのようにだ。

「今日は初めてですよね」

「はい。宜しくお願い致します」

この施設には来園者に渡せるようなパンフレットは一枚もない。その子によって身体も性格も、生活パターンも全て違うからだ。

「では概要からご説明いたします。まず、ここにいる子たちはみんな、恋人やご主人様に捨てられてしまった子で、心と身体に傷を負っています」

牧原は真剣な目で、小さく頷いた。

この施設に来る子の年齢はさまざまだ。二十歳そこそこの子もいれば、三十代くらいの人もある。本来ならきちんとした病院に入った方がいいような子もいるのだけれど、それができないのは、一言で言えば身体が改造されているからだ。

「……身体に、傷」

「はい。所謂人体改造と言われるものです」

「人体改造……そんなものが……」

この施設を訪れているという時点で、ある程度のことには知っているはずだ。しかしみんな、同じような反応を見せる。「まさかそんなことが本当に」と思うのだろう。

「……病院で、ですよね」

「基本的にはそうです。そういった手術を得意とする病院があるんです。そこはきちんとした病院で腕もよく、一般的な括りで言えば美容整形の病院なんですが」

問題はその病院にあるのではない。人体改造を行わせたとのパートナーにある。

「改造が施されている場所は人によります。ペニスがない子、陰囊が埋め込まれている子、乳首が異様に膨らんでいる子、尿道や肛門の括約筋が損傷し、自分で排泄のコントロールができない子……他にも亀頭だけがない子や亀頭しかない子、会陰に尿道を作られ、ペニスが飾り物になってしまっている子……でも一つ共通しているのは、簡単には癒せないほどの心の傷を負っているということです」

普通の失恋だったらつらいけれど、いつかは前を向くことができる。しかし、相手のために身体まで変えて——その手術だってひどく痛むし、怖い。でもそれでもいいと思うくらい好きな相手に、捨てられてしまうという現実。

「そんな子を捨てるなんて……」

「はい。ひどいのは、別れの言葉もなかったという子が多いことです」

「え？」

「言葉の通り、捨てられているんです。喧嘩別れとか、性格が合わなくなってきたとか一般的にあるような話し合いの上での離別ではなく、何も言わず、ふらっと帰って来なくなる……」

「……そんな風に」

「ひどい……」

せめて、別れの言葉でもあれば違うのだろう。けれどそれが無い。だから最初は「帰りが遅いな」というところから始まることが多い。でもいくら待っても帰ってこない。そして夜になり、翌日になり。それでも連絡の一つもない。最初は事故を疑うのだ。けれど、そのままずっと音沙汰がなくて……」

「中にはまだ自分が捨てられたということを受け入れられない子もいるんです」

「それは……そうでしょう……」

事故は悲しい。心配だ。でも、自分が捨てられたということも受け入れることができず、どこかに入院しているのかもしれない、と考えてしまう。

「しかし、どうやってこの施設に？」

「今お話した病院はしっかりとアフターケアを行っていて、患者さんとは定期的に連絡を取るようにされているんです」

きつと、本当はそれだけではない。こういうことの防止のためにもしているのだろうと思う。最近では捨てられる子が増えたためなのか、「数日パートナーが顔を見せなかったら連絡

するように」との指導もしてくれているという。

(懐かしい……)

「それで……？」

「つ、あ、はい。それがなければ私たちも気付けません。全員を保護できればいいのですが……」

仲良くやっていますか、なんて全ての人に連絡をして回ることはできないし、隠そうとされてしまえばそれまでだ。

「——と、まあそんな感じですよ。とにかくみんな心に傷を負っていて……簡単には人を信じることができません」

「はい」

「ここでの面談は平均で半年です。中には引き取りまで一年掛かるようなこともあります。ちら、と牧原の顔を見る。たまににいるのだ。好奇心でここに来て、年単位の時間が掛かると知った途端に「面倒臭いな」という顔をする人が。しかし、牧原はむしろ真剣な顔で頷いた。

「そうでしょう。むしろそれでも足りないかもしれない……」

よかった。牧原はちゃんと分かってくれるタイプのようだ。

「はい。まずはマッチングなのですが、人に会うことができない子もいます。まずは近付かず、プレイルームで遊ぶ姿を見るようなところから始めていきます」

「はい」

「牧原さんのお好みは——」

もらっている書類に視線を落とす。しかし好みのタイプもNGタイプの欄も空欄のままになっっていた。

「すみません、好みを言葉にすることができなくて。ただ、NGというものはありません。どんな子でも、じっくり時間をかけて愛していきます」

「……そうですか。分かりました」

世の中には一定数、心に傷を負ったものが好き、という人間がいる。そしてそういう人に大切に愛されていきたい、と思う人間もいる。だからこそこの施設が成り立つのだけれど、好みがないとストレートに言われてしまうと、傷の大きさだけで判断されてしまいそうな気もして怖い。相手の良さだけでなく傷そのものに重きを置きすぎると、その子の心が回復したときに物足りなさを覚えられてしまうことが懸念される。

「他、何かご質問はございますか」

「いえ……ああ、そうですね、ではここで一番長くいる子は——」

胸が痛い。やはり、この人はただ傷ついた子が好きなのだ。そしてきっと名前を出された子に興味を持つのだろう。

この施設で一番長くいるのは——誰だろう。昨日までならたつちちゃんだった。

(いや……)

本当に一番長いのは——。

(僕だ……)

もう、五年になる。

「どのくらい長くいるんですか」

「——え？」

「ここで一番長くいる子です」

「あ……えつと……昨日までいた子は二年いました」

「その子は、先生がご担当を？」

「はい、一応」

「そうですか……では先生はその子の恩人ですね」

「え？」

「先生がずっと一緒にいてくれたから、立ち直れたんでしょう」

「あ……」

立ち直れた、と言った。実際、ここを巣立つ際にまだ立ち直ってはいないのに。

「……すみません、説明が足りなくて。引き取りとなっても、まだ立ち直ったわけではないんですよ」

「そうなんですか」

牧原は数回瞬きを繰り返した。もしかして、傷を負った子が好き、というわけではないのだろうか。

「むしろ引き取ってからが本番です。それまでも週に数回の面談を繰り返し、数時間の外出を経験させ、引き取りの前には数回の外泊の経験も必要です。そうして時間を掛けて慣らししていくんですが、それでも実際の引き取り——その後の共同生活となると、傷を負った子たちにとっては恐怖の時間の始まりでもあります。前までなら当然のようにここに帰ることができたのに、もうそれができない。上手く支えてあげることができなければ、一人ぼっちだと孤独を感じてしまうようになります」

「……難しいですね」

「はい。愛情はもちろん、根気も必要なんです」

これを聞いて、牧原は席を立つかもしれない。それでもう二度とここには来ないかもしれない。やっぱり普通の子の方がいいと思うかもしれない。でもそれならそれでいい。むしろ、「ここに来てしまった手前」と考えられてしまうよりずっといい。

けれど、牧原は目を細めた。まるで愛しいものを見つけたかのような顔で頷いたのだ。

「聞けば聞くほど、幸せにしたくなりますね」

「——そうですか」

ペットショップから買うのではなく、保健所からもらってくる——そんな感覚なのだろうか。

「好みはない、と言いましたが、フィーリングというか、この子がいいな、というタイプはあります。また改めて伺わせてください」

~~~~~

「ゆーちゃん、入るよ」

「せんせ」

ゆーちゃんの部屋に入ると、どうやらぬいぐるみで遊んでいたらしい。部屋の真ん中に犬のぬいぐるみが座っていた。

「わんちゃんと遊んでたの？」

「うん」

ゆーちゃんは、少し幼い。これが捨てられたことによるものなのか、それともそれより前からなのかは分からないが——とても可愛い。

「わんちゃんもご飯食べてるね」

「うん」

ぬいぐるみの前には折り紙で作られた骨が置かれていた。これはゆーちゃんが来てすぐの頃に爽が折ったものだ。まだゆーちゃんに触れることもできなくて、少しずつ距離を詰めるために折った。それを半年経った今でも大事に使ってくれている。

「ゆーちゃんもご飯にしようね」

「あ……」

用意した折り畳みのテーブルに食事を並べる。けれど、やはりまだゆーちゃんはすぐにそこに座ることができない。

「……今日は特別にわんちゃんもこつちで食べようか」

ぬいぐるみを取り、骨もテーブルの上に置いて。そうすると少しだけゆーちゃんの顔が緩んだ。

「わんちゃんも一緒ね」

ゆーちゃんはどうやら前のパートナーに犬扱いされてきたようだった。食事は犬用の皿から手を使わずに食べる——恐らく長いことそういうプレイを続けていたようで、まだ上手に指を使うことができないのだ。それに、きつとまだ心のどこかで「犬でいたら迎えに来てくれる」と思っている。でもそれはないのだということを見せていかなくてはいけない。

「ゆーちゃんのご飯はお魚だよ。骨はとつてあるからね」

少しずつ、少しずついい。お箸が使えなくてもフォークでもいい。それさえ握るのが難しいなら、手を使ってもいい。たまに甘えて「あーんして」と言ってもいいのだ。ただとにかく、少しずつ以前の生活から離れさせたくて。

（本当はぬいぐるみも犬じゃない方がいいんだけどなあ……）

それでもこうして一緒にいるのは、ゆーちゃんがここへ来た直後のこと。様々な手続きと同時に進行で部屋へ持ち込むものを選ばせていたときに、おもちゃコーナーで見つけたこの犬を抱いて離さなくなったのだ。そこに置いてあるのは全て新品で、新しく来た子は好きなものを選べるのだけれど、そのときはまだゆーちゃんの生活事情もまともに分かっていなくて。手術箇所やアレルギーの有無の確認に忙しく、そのままぬいぐるみをプレゼントしてしまっ

た。

「わん、わん」

「うん、ワンちゃんも美味しいって言ってるね」

幸いだったのはやはり、ゆーちゃんが話せるということだった。完全な犬プレイだったらきつと言葉を発することも許されていなかったことだろう。でもそうではなかったので、本人から少しづつ事情を聞くこともできて。

「お魚、美味しい？」

「うん」

カレイの煮つけを箸で食べるのはまだ難しかったようだ。自分でスプーンに持ち変え、一所懸命口に運ぶ。それでも、汁の上を泳ぐようにしてカレイは逃げていってしまう。

「うう……」

カチャカチャと食器の当たる音。ぐずってもいいのに、ゆーちゃんは懸命に頑張る。

(……ゆーちゃん……)

こういう姿を見ると、ただとにかく切ない。合意だったのか騙されたのか強制だったのかは分からないがずっと手を使うことを禁止され、そして一方的に捨てられて。そしてここで保護されたと思ったら、今度は手を使わずに食べることを禁止されて。それでもゆーちゃんは必死に言うことを聞こうとする。でもそれは人間らしくなりたいたいからじゃない。また捨てられるのが嫌だからだ。

「——あ、そうだ。今日はデザートもあるんだよ」

「でざーと」

ゆーちゃんの手がびたりと止まった。

「うん、甘い。冷たくて、甘くて……何だと思う？」

考えさせる。話させる。そうすることで、好みや趣味が少しずつ見えてくる。

「アイス！」

「ぶつぶー」

「うーん」

中身が幼いゆーちゃんは、何かに気を取られると意識が完全にそちらに向かってしまう。もう手は止まり、スプーンはお皿の上。でもまだそれを叱ることはできない。

「ヒント、いる？」

「うん」

「どんなヒントがいい？」

「どれくらい甘い？」

「えっ……うーん……すごく甘いかな」

そうきたか、と思った。普通では思いつかない質問が可愛くて、思わず頬が緩む。

「おさとう？」

「お砂糖は冷たくないなあ……」

「うーん」

皿の上はまだ一割しか減っていない。食事中に会話をしてはいけない、という家庭もあるけれど、ゆうちゃんにはもっと大事なことがある。

「噛む？」

「あー、うん、噛む……かなあ。でもそのままごつくんもできちゃうかも」

「プリン！」

「正解！」

やった！ とゆうちゃんの顔から笑みが溢れる。

「プリン、プリン！」

とろっとしたプリンやゼリーはゆうちゃんの好物だ。だから食べるのが難しい食事のときに、応援とご褒美の意味でそれらを出す。

「じゃあ、ご飯食べよっか」

「うん！」

魚の中でも特に柔らかいカレイを食べるのは難しい。ご褒美のあげ過ぎは良くないけれど、別に毎日カレイが出ているわけでもないから。

「ゆうちゃん、スプーン使うの上手になったねえ」

「上手？」

「うん、とっても上手。ちゃんと握れるようになったし、落とさなくなったね」

「うん！」

にこにこ笑うゆうちゃんは本当に可愛い。もし犬としての生活の方がゆうちゃんにとつて楽で幸せなのならその方がいいのでは、という話し合いは何度も繰り返された。それでも、せめて手で食事をとれるようになれば外食にだって行けて、生活の幅も広がる。今まで知らなかった楽しみをもつと見つけることができるから。

「ゆつくりでいいからね」

ゆうちゃんもごもごと咀嚼しながら頷いた。

「こんにちは」

「こんにちは。今日もお世話になります」

牧原は初日から、毎日欠かすことなく施設にやってきた。

「遠いところ、大変なんじゃないですか」

「ああ、いえ、今はこつちにホテルを取っています」

「——ここに通うため、ですか」

「はい、もちろん」

牧原の仕事は株取引。恐らく携帯やパソコンがあれば仕事にはなるのだろうが、それにしてもすごい気合いの入れようだ。

「……では、今日の子ですが……」

初日と翌日で施設概要の説明は終えた。それからは、一人一人の説明をしている。と言っ

ても、今の段階で特定のパートナー候補がない子だけ。まだ本人に会わせることはせず、その子の特徴と注意事項だけを伝えていく。

「この子は自分で射精することができません。性欲がないわけではないのですが、上手ではありません」

牧原が真剣な顔で頷く。

「とにかく時間が掛かるので、前もって射精の日を決めておく必要があります。朝から晩まで、射精には一日掛かると思ってください」

「本人は疲れてしまいませんか」

「はい。なのでその日はずっとベッドで過ごすこととなります。食事も軽食を用意しておき、ベッドで食べさせます。排泄はペットシートを敷いておいて、その場ですませます」

「はい」

「一番の問題は、本人に射精が上手くできない自覚があるということです。面倒を掛けてしまっている、と自分を責めることがあるので、射精は二人の大切なスキンシップであり、その子のためだけの時間ではないのだということを伝えていくことが重要です」

「分かりました」

「それから……実際に射精が近くなっても、射精への恐怖で泣いてしまうことがあります。そんなときは無理強いせず、様子を見て過ごします」

「はい」

きつと、牧原ならちゃんとするのだろうな、と思った。しっかりと抱きしめ、不安になんてさせない。

「……それから……」

オムツ替えだって、こまめに濡れていないか確認してくれるだろう。少しでも濡れていたら、もつたないなんて考えずに替えてくれる。赤くなっていれば指で撫でるように薬を塗ってくれて、定期的に痛くなっていないか訊いてくれる。間違っても、「クソの処理くらい自分でできるだろ」なんて言ったりしない——牧原なら。

「先生？」

「——えっ、あ、すみません」

「いえ……先生」

「はい、何でしょう」

「先生は……いえ、すみません、続きをお願いします」

「……はい」

どうしたのだろう。でも、質問でないのなら気にすることはない。

「以前にもお話した通り、引き取りになる前には性行為の練習もあります。中には……この子のように射精にトラウマを持つ子もいますので」

(僕みたいに……)

担当をしている子の最終射精日は分かるのに、もう、自分が最後に射精したのがいつだったのかは覚えていない。

「その練習では先生が教えてくださるんですか」

「はい。その子によって射精に関する注意事項がありますから。それに、どうしても怯えてしまう子が多いので」

行為の練習と言っても、それはその子を絶頂に導いてあげるための練習だ。実際にその場でパートナーが挿入するということはない。寝転んだ方がいきやすい子や、頭を撫でてあげないといけない子、射精のあとそのままお漏らしをしよう子もいる。だから担当のスタッフが実践して見せてあげるのだ。もちろん、射精を見せられるまでの関係になってからの話だけだ。

「射精に怯えるなんて……」

「……理由、お分かりになりますか」

普段の面談でこんなことを言ったのは初めてだった。自分でも、どうして言ったのだろうと不思議に思う。

「理由……射精をすると怒られたから、とかでしょうか」

「それもあります。射精を徹底的に禁止されていた子も……それは、外れない貞操帯をつけたままここに来ることで分かるんですが、そういう子もいます」

「そういう子も、ということは他の理由の子もいるんですね」

「はい」

分かるだろうか。普通の生活をしてきた人間に、この恐怖を想像することができるだろうか。

気付いてほしかった。知ってほしかった。でも、きっと分からないだろう。

牧原は分かってくれなかった——そう思うのが嫌で、牧原よりも先に口を開く。

「捨てられた理由が、射精が下手だったから、という場合です」

「え……？」

「パートナーとの身体の相性が悪かったのか……それとも不感症だったのか、とにかく理由が『感度が悪いから』『イクのが遅いから』という理由で捨てられると、射精への嫌悪感が芽生えてしまうんです——芽生えてしまうことがあるんです」

くくく

「あ……」

「爽くん？」

タイミングがいいのか悪いのか、尿がじわじわと漏れ始めた。仕事で集中しすぎて気付かないことも多いのだけれど、気付いてしまうと気持ち悪い。

「爽くん、どうしましたか」

「……おし……」

「ああ、おしっこですね」

じわじわじわ、潰れた尿道口から漏れ出す尿。勢いもないし、排泄口が狭いせいでは

かなか終わらない。

「うう……」

「爽くん？」

「きもちわるい……」

「ああ……お風呂に行きましようか」

「んん……」

ダメだ。お風呂が汚れてしまう。それに、排尿量はどこにいようと変わらない。

「お風呂で綺麗にしましょう」

「あ……」

そうか、牧原は尿で濡れた陰部が気持ち悪いと勘違いしているのだ。

「ちが……」

「爽くん？」

「……あんまり……出なくて……ゆっくり出るのが気持ち悪くて……」

こればかりは言わないと伝わらないことだ。園長にさえ言ったことのないこの不快感。だから牧原は知る由もない。

「ああ……そうでしたか。すみません。じゃあ……抱っこしましようか。いや、吸いませうか」

「え？」

「おしっこ、勢いがないから不快なんでしょう。それなら吸ってしまいましたよ」

「え、や」

ガーゼ毛布が捲られ、混乱のあまり不快感が一気に吹き飛んだ。だって、吸うって。

(……え、吸う？ 吸う??)

注射器で吸い取られるのだろうか。でも繊細な尿道口に針は怖いし、何よりオムツを開かれてもその間排尿を止めておくということができない。零れて布団が汚れてしまう。せつかく買っておいでくれた新しい布団が。

「あのっ」

「まだ見られたくないですか？」

「あ……や……そういうわけでは……」

確かにそこは汚い。不潔な場所だし、でもそれよりも、傷痕が本当にぐちゃぐちゃなのだ。医者が取ったのではなく、素人が切り落としたのでは、と思うような見た目。そのせいで、最初に運ばれた病院では恥ずかしい質問をされたような覚えがある。あまり、記憶にはないのだけれど。

「私は爽くんにも少しでも楽にしていってほしいんです。排尿が不快なら吸い取りましよう」

そう言って、牧原はズボンを下ろした。

「……穿くタイプ、ですか」

「え、あ、はい……」

抵抗はしなかった。もしその……汚いペニス痕を見てやはり無理だと思われてしまうな

ら早い方がいい。今ならきつと、壊れる前に牧原から離れることができる。

「破きますね」

まだ尿は漏れ続けている。そう言ったのに、牧原はそのまま足の付け根部分を破いて開いてしまった。

「ああ……可愛い。湧き出すように漏らしてる……」

「え……？」

ぐちゃぐちゃに潰れたそこを見て、牧原は可愛いと言ったのか。

「可愛い……？」

「はい。すごく可愛いです……でも確かにこれでは少しくすぐったいかもしれませんね」

でもすぐ楽になりますよ——そう言って、牧原がそこに口を寄せた。そしてまさかと思つた瞬間、音もなくそこを吸われた。口で、優しく。

「あっ……」

(うそっ……)

優しい吸い方だった。強く吸われることもなく、歯が当たることもなく。そして、吸われたことで少しかだけ勢いを増した尿を、コクン、コクン、と静かに飲み干していく。

「ああ……ダメ……」

汚い。なのに、すごく心が洗われていく。満たされていく。

「ああ……ああ……」

気持ちいい。性感とも違う快感。愛で満たされる快感。

「ああ……ああああ……」

継るようにパンダに抱きつく。もう胸の冷たさもない。牧原が丁寧に拭いてくれたからだ。本当に牧原は、爽が快適に過ごせるようにと全てを整えてくれる。

約6万8千文字です。

ハピエンです。宜しくお願い致します。